

遊牧国家におけるケシク制

宮 紀 子

京都大学人文科学研究所 助教

緒 言—研究の背景とねらい

14世紀初頭、フレグ・ウルスの宰相ラシードウッディーンは、*Jāmi' al-Tavārikh* 『集史』第二部の「中国史」の劈頭において、華北 (mon.ja'ut.per.Khitāi) のことを、とうじ漢語では Khān zū Khūn nū / Khān zū va Khūn nū すなわち漢兒匈奴／漢兒=匈奴と呼んでいた、と証言する。じじつ“中華”—— 陝西・山西一帯を掌握してきた歴代王朝のほとんどが、匈奴の後継、鮮卑・拓跋だった。モンゴル政権もその末としての意識を強烈に有していた。

だが、その軍事や官制、行政上のシステム、文化における連続性・共通性は、漢文資料を眺めているだけでは、気づきにくい。北魏をはじめ歴代遊牧民の王朝は、中国を支配するさい、みずからの言語による職名・称号とは別に、『周礼』に法った官職名を併用し、漢文による正史編纂のさい、「中華」の伝統を踏襲し、固有名詞を除いて、可能な限り雅語を以って意識した。鮮卑語の典籍や碑刻は、唐代以降、抹殺されてしまった。かたや、こんにち伝来するテュルク諸語の重要碑刻は十指に満たず、出土した文献もほとんどが仏典で、のこりは文字通り「断片」にすぎない。それらから遊牧国家の具体的なシステムや歴史像を再構築することは不可能である。

こうした状況を打開する方法のひとつが、『集史』をはじめとするモンゴル時代以降のペルシア語史資料およびフレグ・ウルスやジョチ・ウルスと関わったヨーロッパ諸国の様々な文献にみえるテュルク・モンゴル語の語彙収集、分析である。さらにそれらを『元典章』や『至正条格』といった直訳体（モンゴル語文書を語順どおりに口語漢語の語彙を以て逐語訳）で記された大元ウルスの政書や膨大な関連文献、大カアンやモンゴル諸王たちの命令文と比較・照合することで各語の実態を正確に把握でき、雅文漢文における意識のパターンも見えてくる。その知識を以て時代を遡り歴代正史や碑刻を照射すれば、新たな事実が浮かび上がる（この手法は、皇帝・王

族クラスのバイリンガル資料がそれなりに遺されていながら、遅々として研究の進まない遼代にも、おそらく有効)。

そして、遊牧国家の軍事・行政等の諸制度を理解するうえで最初に押さえるべきは、皇帝、諸王を取り巻く側近・侍衛たちの kešik^{ケシク} 怯薛制だろう。

研究成果

・宮紀子「ブルグチ再考」『東方学報（京都）』86 pp.740-693. 2011年8月

・窪田順平編／小野浩・杉山正明・中西竜也・宮紀子著『ユーラシアの東西を眺める』（口絵解説8-15） pp.x-xvii, 「2 カラ・ホト出土文書の対訳語彙集断片について」 pp.27-36. 「3 Mongol baqši と bičikči たち」 pp.37-64.、総合地球環境学研究所 2012年3月

考 察

Dastūr al-Kātib fī Ta'yin al-Marātib 『品官任命における書記規範』は、フレグ・ウルス末期に編纂された行政文書の範例集を母体とし、ケシクの職掌をもっとも要領よくかつ詳細に述べる。ウイグル文字モンゴル語文書からのペルシア語訳で、東方の『元典章』等の資料群とも対応する。この中から、buralyčī 遺失物管理官、yurtčī 営盤官、jarγuči 断事官、uluy bitikči 大書記と mongγol baqši 蒙古師父、böke'ül 糧食官、todqa'ul 通行税徴収官／街道警備官¹⁾、jaša'ul 整治官をとりあげ、その職責を分析した。とくに、uluy bitikči、mongγol baqši については、この20年来、異様なくらいに日本で流行し、最近では韓国・中国にも波及している「モンゴル命令文研究」(アフロ・ユーラシアに展開した書式だが、研究は大元ウルスに偏向する)のほんらい起点とすべき資料であり、収録される任命書4通の全文を訳出・紹介した。そのさい、東西の連動を一目瞭然にするために、現存するさまざまな対訳資料を利用しながら、あえて『元典章』以下が使用する語

彙を以て翻訳した。近年の「内陸アジア史」「西南アジア史」に危惧される研究の蝸壺化の打開、匈奴・突厥等の外交文書の書式²⁾の研究にも役立つと考えられる。

ひるがえって、buralyčiを中心に bawurči 厨子、šarbači 菓膳のケシク集団の職掌の詳細とその歴史を辿った結果、①大元ウルスの数々の政変の背後には、各ケシク集団の争いが潜んでいたこと②北魏や唐代における左虞候、兵部司門郎中、刑部駕部郎中などは、buralyčiが、右虞候は ĵasa'ul や yurtči が担当していたこと③1077年頃に編纂されたマフムド・カーシュガリーの *Dīwān Lūghāt al-Turk* 『突厥語総覧』によれば、buralyči はテュルク語の soruγčin に等しいこと、などが確認された。

この soruγčin は、北魏の拓跋燾佛狸 būri の末子の名——樹洛真ともなっている。Būri は狼の意で、テュルク・モンゴル諸部族の始祖伝説を連想させる。そもそもかれの長男の名は天真、チンギス・カンの幼名 Temüjin 帖木真／忒没真に近く、四男は可博真 Qapučin といった。また、北魏の王族の系譜・史伝は、“金冊”、“秘録”と呼ばれており、そこには歴代皇帝の遺訓なども収録されていた。『元朝秘史』や『集史』が参照した、かの Altan Debter, Tobča'an 金冊と同じである。

じじつ、『南齊書』卷三七「魏虜伝」が伝える鮮卑語のケシク集団の職掌は、テュルク・モンゴル語ですべて解読される。帳幕内の左右に控える人々を「直真 ičqčin/čikčin」、幕外の左右を「烏矮真 üyčin/uyčin」と呼び、各曹局のうち、文書の吏を「比徳真 bitikčin」、衣を擔ぐ人を「樸大真 boytayčin」、仗を帯びる人を「胡洛真 qorčin」、通事の人を「乞萬真 kelemečin」、門を守る人を「可薄真 qapučin」、朝廷の駅伝用の車馬を扱う賤民を「拂竹真 yuzuqčin / bolčuqčin / būdüyčin」、諸州の駅站の人を「咸真 yamčin」、人を殺める者を「契害真 kitu'ačin / qudqāčin^{あるじ}、主のために辞を宣下・上奏する人を「折潰真 ĵaryučin」、貴人に食事を提供する人を「附真 bawurčin」という。三公・貴人は、通称「羊真 yančin / jočin」。kidu'a は背中に背負う刀³⁾、boytay は布覆いで、モンゴル朝廷の üldüči 環刀持ち、sükürči 傘蓋持ちに相当する。

なお、この漢字音訳の解読の手がかりとなったのは、ウイグル文字で写された漢文仏典の音価であった。カールグレンが作り上げた上古音・中古音は、現実と乖離した虚構の世界の音価である。せつかく生の貴重な音価データを手にしているソグド語やテュルク語といったユーラシア中央域の諸言語の研究者までもが、これを信

奉するのは愚かしい。じゅうらいの「中国語学」は、いちど根本的な見直しが必要だろう。

ちなみに、南齊の次の梁代の仏典翻訳におけるサンスクリットの漢字音訳も、ウイグル漢字音が示す音価にきわめて近い。南朝での漢訳にもテュルク系の僧が携わっていた、もしくは北朝の翻訳事業の成果を用いていた可能性がある。

以上の研究に附随して、大英図書館が蔵するカラ・ホト⁴⁾出土の文書断片 Or.12380/3948 が、基本的にはペルシア語を漢字音訳し傍らに訳語を附した対訳辞書—おそらくは站赤^{ジヤムチ}の館駅における外交使節団や隊商の接待・宿屯を担当する吏人のための一であることを明らかにした。モンゴル時代の要衝の地で、ペルシア語、テュルク語、モンゴル語が混在していた様子が窺える。東西交流の証拠が、ここにまたひとつ付け加わった。

おわりに

ケシクのみならず、北魏から唐にかけての都城もまた、匈奴、オグズ以来の遊牧民の野営方式に由来していたこと、さらには日本の藤原京・平城京等もこれを模倣していたこと、近年、杉山正明によって指摘されている。さらに附言すれば、足利義満は、金閣寺舍利殿で有名な北山第を中心に、いわゆる平安京のすぐ北に、新たな方形の、それも内部に河川を取り込んだ都城建設を企てたが、明らかに大元ウルスの大都、旧金朝の中都(南城)のダブル・シティをモデルとしていた。おそらくは、ささやかなながらも「南北合一」を成し遂げた自らを世祖クビライに擬したのだ(「武家」の統領尊氏=太祖チンギス・カン)。入れ知恵をしたのは、留学帰りの禅僧たちだろう。日本史も遊牧国家と決して無縁ではないのである。

註

- 1) ペゴロッチの『商業指南』にみえる tantaullo, tantaulaggio, tantaulagio, tantaulagi は, **تنتاول** を **تنتاول** に読み誤ったがためにほかならぬ表記であり、同書の参考資料が、*Il Milione* 『東方見聞録』と同様ペルシア語で書かれていたことを示唆する。その職務については、“Tantaullo in tartaresco, guardia in più linguaggi, Questi nomi vogliono dire gente che guardano i luoghi e cammini per gli signori e per gli uomini / comuni **タタルにおける todqa'ul** とは、別の語で言い換えれば**警備隊員／監視官**。これらの名称は、諸侯および封臣／各行政単位のために場所・道路を監視／警備する人々を意味する”と説明される。
- 2) たとえば、于闐国の元豊二年(1079)の国書は、“于闐^{ホータン}

国の僂僂、福の力量有り文の法を知りたる黒汗王、書を東方の日出づる処の大世界の田地の主、漢家の阿舅の大官家に与ふ”と漢訳されている。

- 3) 『元朝秘史』巻六 181 節は、チンギス・カンが、ライバルのオン・カン^{イラカ}を“乞都阿赤額不堅 kidu'ači ebügen”と謗ったという。明朝廷の翻訳官は、これを“好殺的老人——人殺し好きの老いぼれ”と漢訳した。ほんらい kidu'ačīn は、背中に刀を背負って侵入者・暗殺者を返り討ちにするボディガードで、『南齊書』の“人を殺める者=契害真”とは、そのことを指したものだ。だが、『集史』「チンギス・カン紀」の当該箇所を併せ読めば、チンギス・カンが、アングたるサンゲン（オン・カンの息子）をメルキト部の長トクトガの bö'e 師公・覲扱いたしたのと同様に、オン・カンがかつてブイルク・カンの刀持ち、ケシクの一員だったことを持ち出し貶めたもの、対句表現と見ることができる。職掌の正確な理解によって、既知の文献もことなる読み方が出来、別の史実が浮かび上がってくる好例である。ちなみに、かく罵ったチンギス・カンも、その後まもなくナイマンのタヤン・カンに“大金皇帝の qorči 箭筒士”呼ばわりされた。
- 4) カラ・ホトは、モンゴル時代、亦集乃路と呼ばれた（同地において発見された数々のウイグル文字モンゴル語文書断片の表記では、Yisina もしくは Yisinai、パクパ字では Yitsinay と綴られる）。西夏語の「黒い水」を踏まえた呼称とされる。『集史』「チンギス・カン紀」に“さて、Sangūn サンゲンは、彼の父が捕獲され殺されているそ

の最中に逃走した。外に高飛びして、その名が Īshīq-balaqasūn > Īshīnaq-balaqasūn である邑に、すなわち Mughūlīstān モグリスターンの邦土の領域の chūl > čöl 沙漠の境界の先端に、落ちて通過して Būrī Tubut の邦土に入り行き・・・”とあり、資料源を同じくする『皇元聖武親征録』では、“亦刺合（=鮮昆）走西夏，過亦即納城，至波黎吐蕃部”と訳す。いっぽう、『集史』「部族志・ケレイト部」ではこの邑を AYSAQ > Īsāq と記す。このふたつの表記を矛盾なく解決しようとすれば、本来、AYSNAQ > Īsināq と記したかったのだと考えられる。であれば、この亦即納 Īsināq / Īshīnaq の音価は、とうじのテュルク語での古称を正確に表わした貴重な資料といえる。

謝 辞

公益財団法人三島海雲記念財団の研究助成金により、従来手薄であったヨーロッパ諸語の貴重な原典資料・研究書（近代列強の東方進出の産物）、さらには魏晋南北朝期の基礎資料を重点的に収集することができました。それらの分析を通じて、多方面に視界が啓け、充実した1年間となりました。今後も精進を重ね、成果を順次公開していく所存です。本当にありがとうございました。